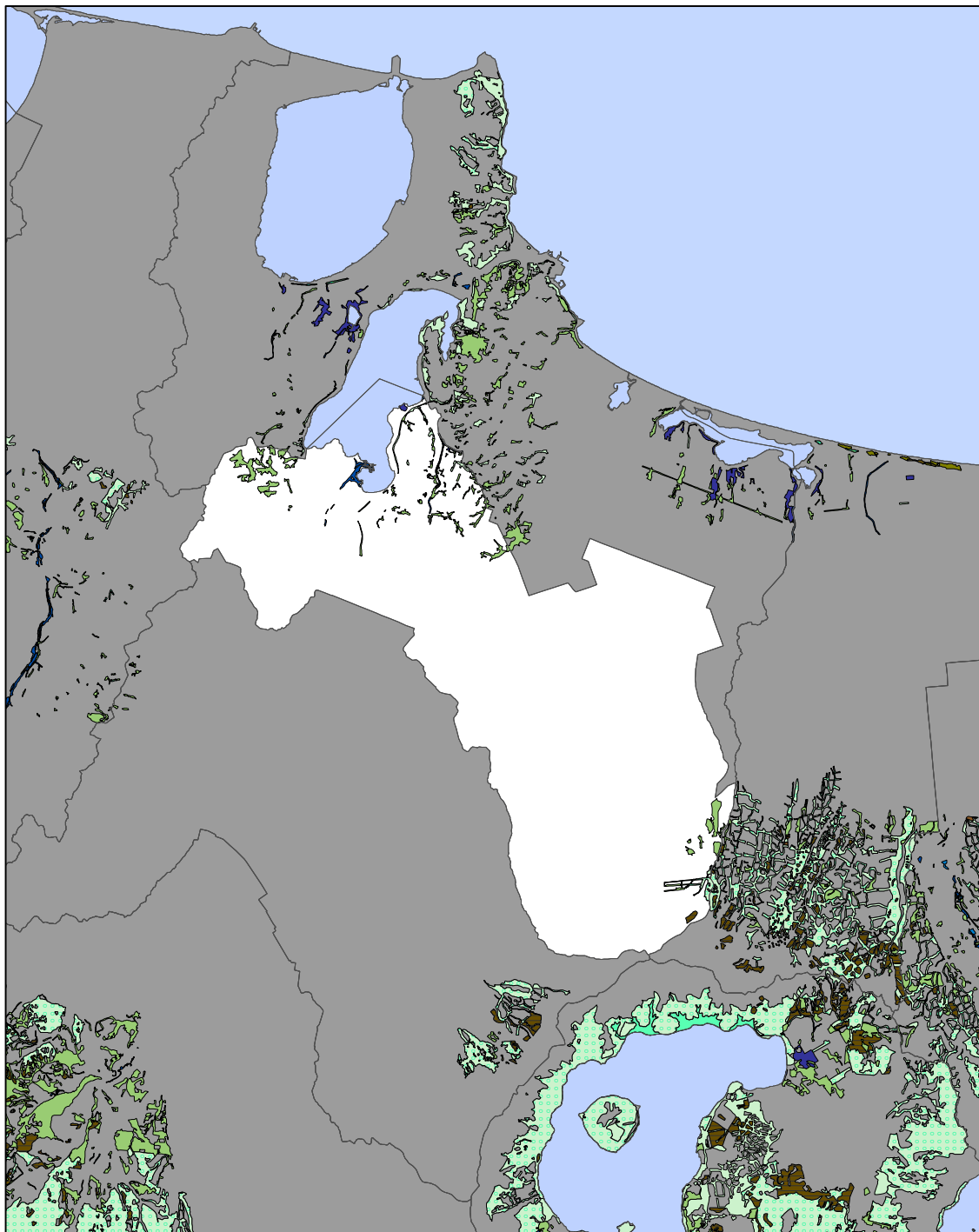
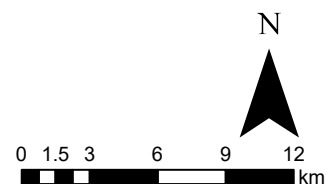




凡例

次ページ



出典：環境省「生物多様性情報システム自然環境保全基礎調査 植生調査 第6回（1999～2012）、第7回（2013～）
1/25,000 植生図（2025 年閲覧）」を基に作成

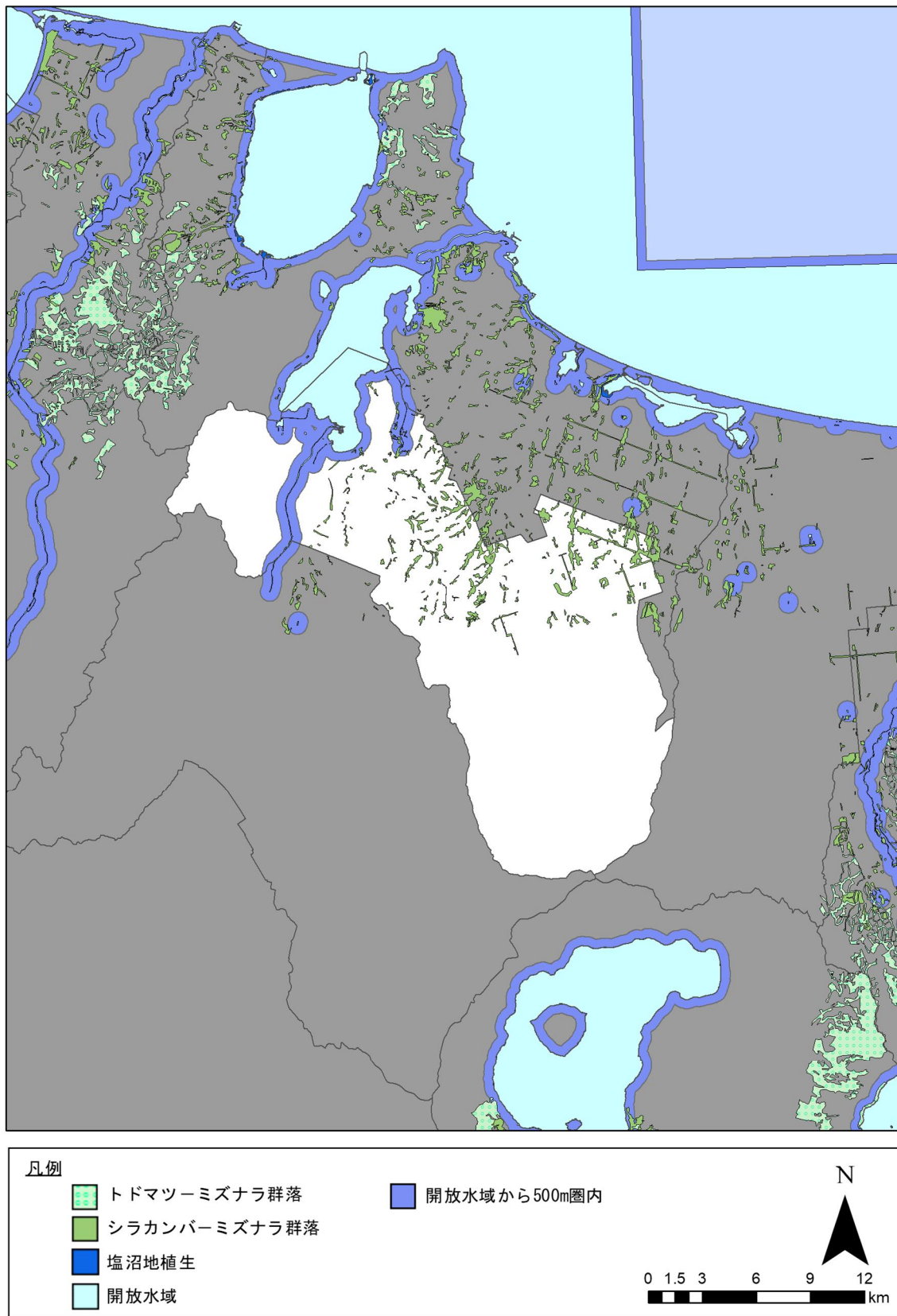
図 5-101 選定した植生（クマタカ）

凡例

	アカエゾマツ群集 (湿原型)		ヤナギ高木群落 (I V)
	カシワ群落 (I V)		ヤナギ低木群落 (I V)
	トドマツミズナラ群落		シラカンバーミズナラ群落
	エゾイタヤミズナラ群落		その他植林 (常緑針葉樹)
	ハンノキ群落 (I V)		その他植林 (落葉広葉樹)
	ダケカンバーエゾマツ群落		
	ダケカンバ群落 (I I I)		

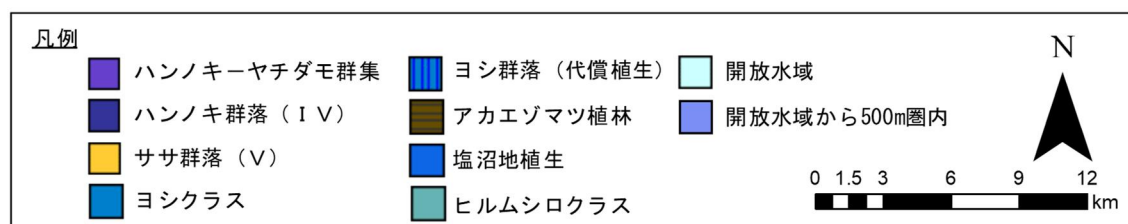
出典：環境省「生物多様性情報システム自然環境保全基礎調査 植生調査 第6回（1999～2012）、第7回（2013～）
1/25,000 植生図（2025 年閲覧）」を基に作成

図 5-102 選定した植生（クマタカ）凡例



出典：環境省「生物多様性情報システム自然環境保全基礎調査 植生調査 第6回（1999～2012）、第7回（2013～）
1/25,000 植生図（2025年閲覧）」を基に作成

図 5-103 選定した植生（オオワシ）



出典：環境省「生物多様性情報システム自然環境保全基礎調査 植生調査 第6回（1999～2012）、第7回（2013～）
1/25,000 植生図（2025 年閲覧）」を基に作成

図 5-104 選定した植生（タンチョウ）

表 5-60 植生の選定理由 (1/4)

種	分布の特徴	文献		選定した植生	選定理由
チュウヒ	日本では湿原に生息・繁殖する唯一の猛禽類で、湿原の生態系の頂点に位置している。チュウヒが生息するためには、多様な食物資源が安定的に供給される豊かな生物多様性が確保された生息環境としての湿地生態系が必要である。<u>チュウヒの生息は、良好な湿地生態系が維持されていることを指標している</u>と言うこともできる。 冬期は、日本全国の<u>草地、ヨシ原、ヨシ原に隣接する刈り田跡などで見られる</u>が、北海道、東北地方では少なく、越冬のための集団ねぐらが、栃木県、茨城県、千葉県、愛知県、三重県、岡山県、山口県で確認されている。 <u>越冬ねぐらは広いヨシ原にあることが多く、これらに隣接する草地、刈り田跡などで狩りをする。</u> チュウヒの<u>採食地は、ヨシ原、農耕地（用排水路沿いの草地を含む）、牧草地等である。</u>	環境省「チュウヒ保護の進め方」	⇒	塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、生息地として考えられるため。
				ハンノキ群落（ⅠⅤ）	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				ハンノキーヤチダモ群落	ブナクラス域の山地の谷間や湧水辺等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				ヤナギ高木群落（ⅠⅤ）	河川の上・中流域の河畔、低湿地等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				ヤナギ低木群落（ⅠⅤ）	河川の上・中流域の河畔、低湿地等に成立する落葉広葉樹の低木群落であり、生息地として考えられるため。
				ゴルフ場・芝地	草地であり、採食地として考えられるため。
				牧草地	牧草地であり、営巣環境、採食地として考えられるため。
				ハマニンニクーコウボウムギ群落	砂丘に成立する草本群落であり、採食地として考えられるため。
				ヨシクラス	ヨシが生育する低層湿原であり、採食地として考えられるため。
				畑雑草群落	畑地に成立する雑草群落であり、営巣環境、採食地として考えられるため。
	営巣環境の条件として、<u>巣の直下が湛水し、周囲が水域などで遮られることにより、外敵である哺乳類の侵入しづらい環境であること、ほぼヨシだけが旺盛に生育する植生であることが重要であると推察される。</u> <u>主なハンティング場所はヨシ原、農耕地（用排水路沿いの草地を含む）、牧草地等である。</u>ヨシ原の中では、獲物をつかまえやすい細い水路や池沼を含むヨシ原、湛水域にあるヨシ等が生育する浮島を愛好する。	環境省「風力発電事業におけるクマタカ・チュウヒに関する環境影響評価の基本的考え方」	⇒	塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、営巣環境、採食地として考えられるため。
				ハンノキ群落（ⅠⅤ）	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、水域として営巣環境条件に当てはまると考えられるため。
				ハンノキーヤチダモ群落	ブナクラス域の山地の谷間や湧水辺等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				ヤナギ高木群落（ⅠⅤ）	河川の上・中流域の河畔、低湿地等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、水域として営巣環境条件に当てはまると考えられるため。
				ヤナギ低木群落（ⅠⅤ）	河川の上・中流域の河畔、低湿地等に成立する落葉広葉樹の低木群落であり、水域として営巣環境条件に当てはまると考えられるため。
				ゴルフ場・芝地	草地であり、採食地として考えられるため。
				牧草地	牧草地であり、営巣環境、採食地として考えられるため。
				ハマニンニクーコウボウムギ群落	砂丘に成立する草本群落であり、採食地として考えられるため。
	サロベツ原野や勇払原野のチュウヒは <u>農地や造成地などの民有地にあるササ原やヨシ原で繁殖することが多い</u> ため、地域住民や行政機関、開発事業者による高い保護意識の醸成が必要である。	日本野鳥の会HP	⇒	ヨシクラス	ヨシが生育する低層湿原であり、営巣環境として考えられるため。
				ササ群落（Ⅴ）	ササ群落であり、営巣環境として考えられるため。
				ササーシラカンバ群落	草本層にはチマキザサ、クマイザサ、チシマザサ等のササ類が優占することが多いシラカンバを主とする二次林であり、営巣環境として考えられるため。
				ヨシクラス	ヨシが生育する低層湿原であり、営巣環境として考えられるため。

※) 赤字は植生の選定において、参照した文献の記載

表 5-61 植生の選定理由 (2/4)

種	分布の特徴	文献		選定した植生	選定理由
オジロワシ	河川や湖沼などの淡水域から海岸や島嶼などの海水域まで、 <u>多様な水域環境周辺で生息する</u> 。生息環境には餌場となる水域のほかに、営巣場所やとまり場、ねぐらとして利用するための大木、海岸部の崖や岩棚などを必要とする。	認定NPO法人バードリサーチ「バードリサーチニュース Vol.3 No.2」	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、営巣環境として考えられるため。
				ハンノキ群落 (I V)	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巣環境として考えられるため。
	<u>海岸や湖沼周辺、河川流域の大木</u> に営巣。 海鳥類、スケトウダラ等の海産魚類を捕食。漁船が捨てる雑魚も餌にしている。 冬期は本州北部から中部にも渡り、まれに九州、琉球列島などに飛来する。	環境省レッドデータブック	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、営巣環境として考えられるため。
				ハンノキ群落 (I V)	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巣環境として考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、営巣環境として考えられるため。
	オジロワシは、冬季に我が国へ飛来、越冬する大型の猛禽類で、多くの個体は春季にロシアに渡り繁殖するが、一部の個体は我が国に留まり、北海道の <u>海岸、湖沼周辺等</u> で繁殖する。主たる越冬地は北海道及び本州北部であるが、全国に生息が確認される。	林野庁HP「オジロワシ保護増殖事業計画」	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、営巣環境として考えられるため。
				ハンノキ群落 (I V)	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巣環境として考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、営巣環境として考えられるため。
			⇒	開放水域	河川や池沼等であり、生息地として考えられるため。
				ハンノキ群落 (I V)	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、生息地として考えられるため。
				アカエゾマツ植林	常緑針葉樹のアカエゾマツの植林であり、営巣環境として考えられるため。
				エゾマツートドマツ群集	エゾマツ、トドマツが優占した常緑針葉樹の高木林であり、営巣環境として考えられるため。
				エゾマツ植林	常緑針葉樹のエゾマツの植林であり、営巣環境として考えられるため。
				シラカンバーミズナラ群落	針広混交林域の二次林であり、営巣環境として考えられるため。
	<u>河川沿い、湖沼、海岸沿いに生息</u> するが、川沿い、内陸にも入る。 <u>繁殖地は海岸近く付近に川や湖沼のある森林で、ミズナラ、ダケカンバ、トドマツ、エゾマツ</u> などの古巣を補強しながら、大きな皿型に巣を作る。	北海道レッドデータブック	⇒	エゾイタヤミズナラ群落	シナノキ、エゾイタヤ、ミズナラ、ヤチダモ等の落葉広葉樹が多数生育する落葉広葉樹林であり、営巣環境として考えられるため。
				ダケカンバーエゾマツ群落	エゾマツ、ダケカンバが混生する高木林であり、営巣環境として考えられるため。
				ダケカンバ群落	ダケカンバ、ウダイカンバ等が優占する落葉広葉樹の高木二次林であり、営巣環境として考えられるため。
				ダケカンバ群落 (I I I)	ダケカンバ、ウダイカンバ等が優占する落葉広葉樹の高木二次林であり、営巣環境として考えられるため。
				トドマツミズナラ群落	ミズナラ、エゾイタヤ等の落葉広葉樹に常緑針葉樹のトドマツが30～70%の割合で混生する針広混交林であり、営巣環境として考えられるため。
				トドマツ群落 (誘導林)	トドマツを主木とする針葉樹誘導林であり、営巣環境として考えられるため。
				トドマツ植林	常緑針葉樹のトドマツの植林であり、営巣環境として考えられるため。
				その他植林 (常緑針葉樹)	常緑針葉樹の植林であり、営巣環境として考えられるため。

※) 赤字は植生の選定において、参照した文献の記載

表 5-62 植生の選定理由 (3/4)

種	分布の特徴	文献		選定した植生	選定理由
クマタカ	クマタカの生息環境は森林地帯であり、山地の中下部に営巢可能な大径木が存在することが重要である。ただし、生息環境の植生は地域によって異なり、例えば山形県ではブナの自然林を含む落葉広葉樹林の面積が広く、滋賀県では落葉広葉樹林とスギ・ヒノキ植林が同面積、宮崎県では常緑広葉樹二次林の面積が比較的に広いなど、クマタカは地域ごとの植生環境にうまく順応していると考えられる。 クマタカはすべて樹上に巢を造るが、その営巢木の生えている位置は谷の急斜面であることがほとんどであり、その斜度は20～50度程度であることが多い。営巢木のある斜面の向きについては、地域によっては南向きが多いものの、基本的には営巢に向くような地形や植生（営巢に適した樹木の存在等）に左右されるため、必ずしも一定しているわけではない。 クマタカの営巢木としてはアカマツ、モミ、ツガ、キタゴヨウといった常緑針葉樹が好まれることが多いものの、地域によってはブナ、ミズナラ、トチノキ、シイ・カシ類といった広葉樹が利用される場合も多く、地域の植生環境にある程度合わせて営巢木が選択されていると言える。また、造巢に使われる巢材については、通常、営巢場所付近の林冠部を形成している樹種から調達されていると考えられる。	環境省「猛禽類保護の進め方(改訂版)―特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて―」	⇒	アカエゾマツ群集（湿原型）	常緑針葉樹であるアカエゾマツの高木林であり、営巢環境として考えられるため。
				アカエゾマツ植林	常緑針葉樹のアカエゾマツの植林であり、営巢環境として考えられるため。
				エゾイタヤーミズナラ群落	ブナクラス域の山地及び丘陵地の落葉広葉樹林であり、営巢環境として考えられるため。
				カシワ群落（ⅠⅤ）	ブナクラス域の落葉広葉樹低木群落であり、営巢環境として考えられるため。
				カツラ群落	ブナクラス域における山地の溪側に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巢環境として考えられるため。
				ハンノキ群落（ⅠⅤ）	ブナクラス域における沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巢環境として考えられるため。
				ヤナギ高木群落（ⅠⅤ）	ブナクラス域における河川の上・中流域の河畔、低湿地等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巢環境として考えられるため。
				ヤナギ低木群落（ⅠⅤ）	ブナクラス域における河川の上・中流域の河畔、低湿地等に成立する落葉広葉樹の低木群落であり、営巢環境として考えられるため。
				トドマツーミズナラ群落	ミズナラ、エゾイタヤ等の落葉広葉樹に常緑針葉樹のトドマツが30～70%の割合で混生した針広混交林であり、営巢環境として考えられるため。
				ダケカンバーエゾマツ群落	コケモートウヒクラス域に分布する常緑針葉樹、落葉広葉樹の混交する高木林であり、営巢環境として考えられるため。
				ダケカンバ群落	コケモートウヒクラス域における伐採跡地、山火事跡地等に再生した落葉広葉樹の高木二次林であり、営巢環境として考えられるため。
				ダケカンバ群落（ⅠⅠⅠ）	コケモートウヒクラス域における伐採跡地、山火事跡地等に再生した落葉広葉樹の高木二次林であり、営巢環境として考えられるため。
				その他植林（常緑針葉樹）	地域的な特徴を示す従来の常緑針葉樹の植林であり、営巢環境として考えられるため。
				その他植林（落葉広葉樹）	地域的な特徴を示す従来の落葉広葉樹の植林であり、営巢環境として考えられるため。
低山～亜高山帯の 混交林 、 針葉樹林 、 スギ や ヒノキ の 植林 などの森林に生息	環境省「風力発電事業におけるクマタカ・チュウヒに関する環境影響評価の基本的考え方」	⇒	トドマツーミズナラ群落	ミズナラ、エゾイタヤ等の落葉広葉樹に常緑針葉樹のトドマツが30～70%の割合で混生した針広混交林であり、生息地として考えられるため。	
		⇒	その他植林（常緑針葉樹）	地域的な特徴を示す従来の常緑針葉樹の植林であり、生息地として考えられるため。	
丘陵帯上部から山地帯の森林に生息する。 落葉広葉樹林 や 針葉樹 と 広葉樹 の 混交林 に 多く見られる。	岐阜県HP	⇒	トドマツーミズナラ群落	ミズナラ、エゾイタヤ等の落葉広葉樹に常緑針葉樹のトドマツが30～70%の割合で混生した針広混交林であり、生息地として考えられるため。	
			シラカンバーミズナラ群落	針広混交林域の二次林であり、生息地として考えられるため。	
留鳥。繁殖期は2～7月頃である。 営巢は樹上で行われるが、アカマツ、モミなどの針葉樹を好み 、周辺の森林樹冠より突出した高木に営巢することが知られている。			その他植林（落葉広葉樹）	地域的な特徴を示す従来の落葉広葉樹の植林であり、生息地として考えられるため。	
			アカエゾマツ群集（湿原型）	常緑針葉樹であるアカエゾマツの高木林であり、営巢環境として考えられるため。	
			アカエゾマツ植林	常緑針葉樹のアカエゾマツの植林であり、営巢環境として考えられるため。	

※）赤字は植生の選定において、参照した文献の記載

表 5-63 植生の選定理由 (4/4)

種	分布の特徴	文献		選定した植生	選定理由
オオワシ	越冬地では魚類、海鳥類、海棲哺乳類の漂着死体などを食物とし、また、スケトウダラ漁等から供給される魚にも大きく依存。 越冬地では <u>海岸や湖沼近くの針広混交林</u> をねぐらにしている。	環境省HP「自然環境・生物多様性－希少な野生動物の保全」	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、ねぐらとして考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、ねぐらとして考えられるため。
				トドマツ－ミズナラ群落	ミズナラ、エゾイタヤ等の落葉広葉樹に常緑針葉樹のトドマツが30～70%の割合で混生した針広混交林であり、越冬ねぐらとして考えられるため。
				シラカンバー－ミズナラ群落	針広混交林域の二次林であり、越冬ねぐらとして考えられるため。
	主として海岸近くや、 <u>平地の河川・湖沼の付近に生息する</u> 。樺太・カムチャッカ半島などで繁殖し、冬期北海道から本州の沿岸ぞいに南下し、まれに奄美大島や島島などに飛来することもある。	文化庁HP「文化遺産オンライン」	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、採食地として考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、採食地として考えられるため。
		林野庁「オオワシ保護増殖事業計画」	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、生息地として考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、採食地として考えられるため。
タンチョウ	国内では、北海道東部の <u>湿原を中心に分布している</u> 。 クッチャロ湖やサロベツ湿原、十勝川流域などに繁殖分布が拡大する一方で、越冬期はほとんどの個体が釧路地域に集中分布する。 <u>夏期は湿原に分散して営巣・育雛を行い</u> 、冬は里近くへ移動し群れで生活をする。	環境省レッドデータブック	⇒	ササ群落（ⅠⅠ）	風背側斜面、なだれ地、積雪の残る場所、湿原周辺等にもみられ、生息地として考えられるため。
				ハンノキ群落（ⅠⅤ）	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				ハンノキ－ヤチダモ群集	ハンノキが優占し、地の谷間や湧水辺等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、生息地として考えられるため。
				ヨシクラス	低層湿原であり、生息地として考えられるため。
				ヨシ群落（代償植生）	排水不良で耕作放棄された土地、排水路の周辺、攪乱を受けた低湿地等に代償植生として成立するヨシ群落であり、生息地として考えられるため。
				アカエゾマツ植林	岩角地、湿原、砂丘等の特殊立地に群落を形成し、生息地として考えられるため。
	<u>繁殖地は広い低層湿原（水位の高い湿原）、河川、湖沼、海岸などに接する湿原。越冬期には湿地、耕地、不凍河川、湖沼、干潟に生息するが、多くは給餌場集まる。</u> 国内では北海道道東の <u>湿原に分布</u> 。 雑食性で <u>湿地に生息するあらゆる動植物を食べる</u> 。また <u>河川や湖沼では水の中を歩き、子魚をくちばしで捕らえる</u> 。 <u>営巣地はヨシやスゲ類を主とする湿原。繁殖地ではつがいに分かれて湿原に分散する</u> 。 湿原の中の地上に枯れたヨシを積み上げ、大きな皿形の巣をつくる。	北海道レッドデータブック	⇒	開放水域	河川や池沼等であり、営巣環境として考えられるため。
				塩沼地植生	小湾や河口の波浪の影響が少ない塩沼地に形成される草本群落または低木群落であり、営巣環境として考えられるため。
				ヒルムシロクラス	池や沼、浅い湖、旧河道等の湛水域に成立する水生植物群落であり、営巣環境として考えられるため。
				ササ群落（ⅠⅠ）	風背側斜面、なだれ地、積雪の残る場所、湿原周辺等にもみられ、営巣環境として考えられるため。
				ハンノキ群落（ⅠⅤ）	沼沢、湿原に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巣環境として考えられるため。
				ハンノキ－ヤチダモ群集	ハンノキが優占し、地の谷間や湧水辺等に成立する落葉広葉樹の自然林であり、営巣環境として考えられるため。
				ヨシクラス	低層湿原であり、営巣環境として考えられるため。
				ヨシ群落（代償植生）	排水不良で耕作放棄された土地、排水路の周辺、攪乱を受けた低湿地等に代償植生として成立するヨシ群落であり、営巣環境として考えられるため。
				アカエゾマツ植林	岩角地、湿原、砂丘等の特殊立地に群落を形成し、営巣環境として考えられるため。

※）赤字は植生の選定において、参照した文献の記載

e) 鳥類分布ポテンシャルエリアの作成

前項で選定した植生を図示することで、鳥類の生息に重要な場所として鳥類分布ポテンシャルエリアを作成した。作成したエリアを以下に示す。

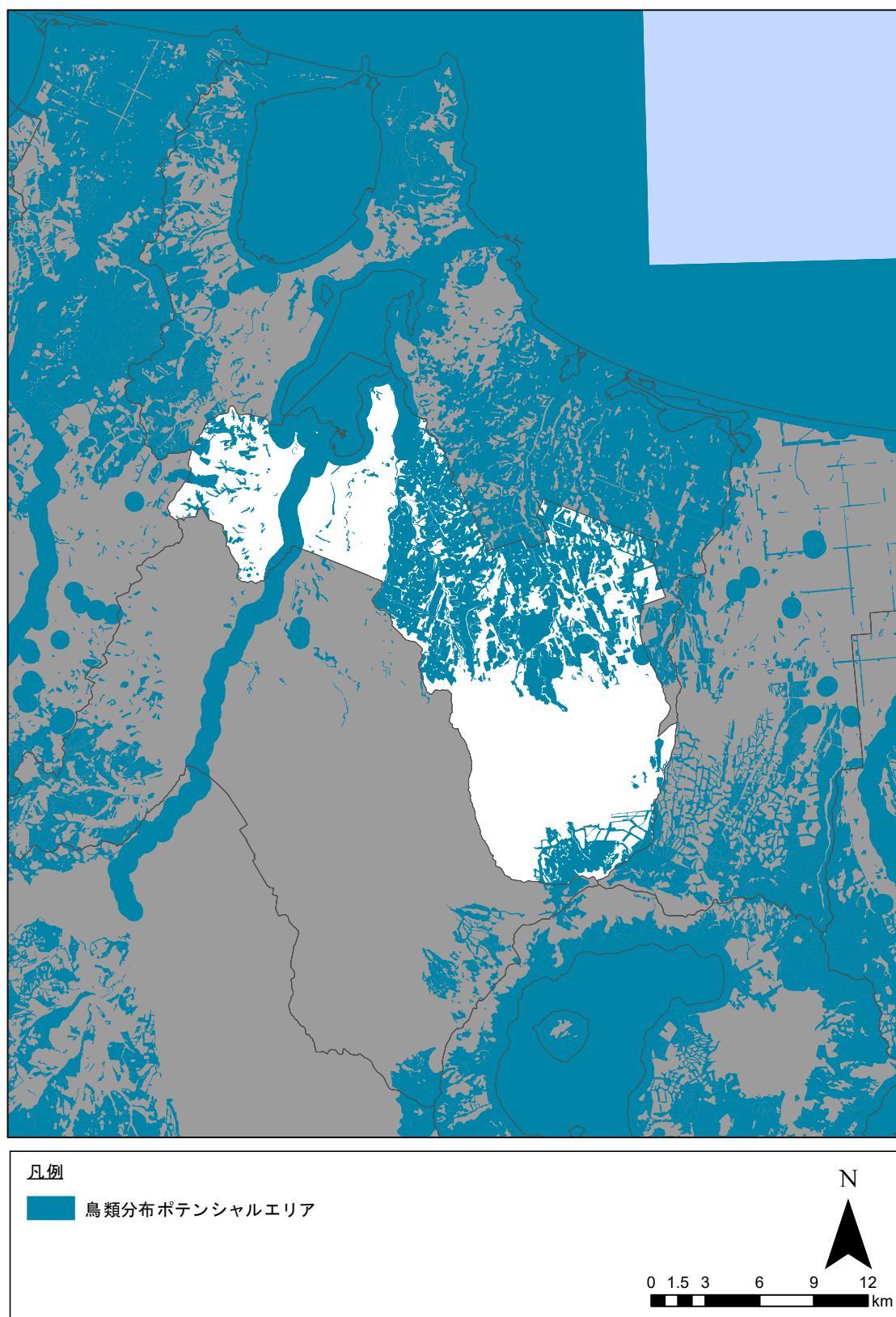
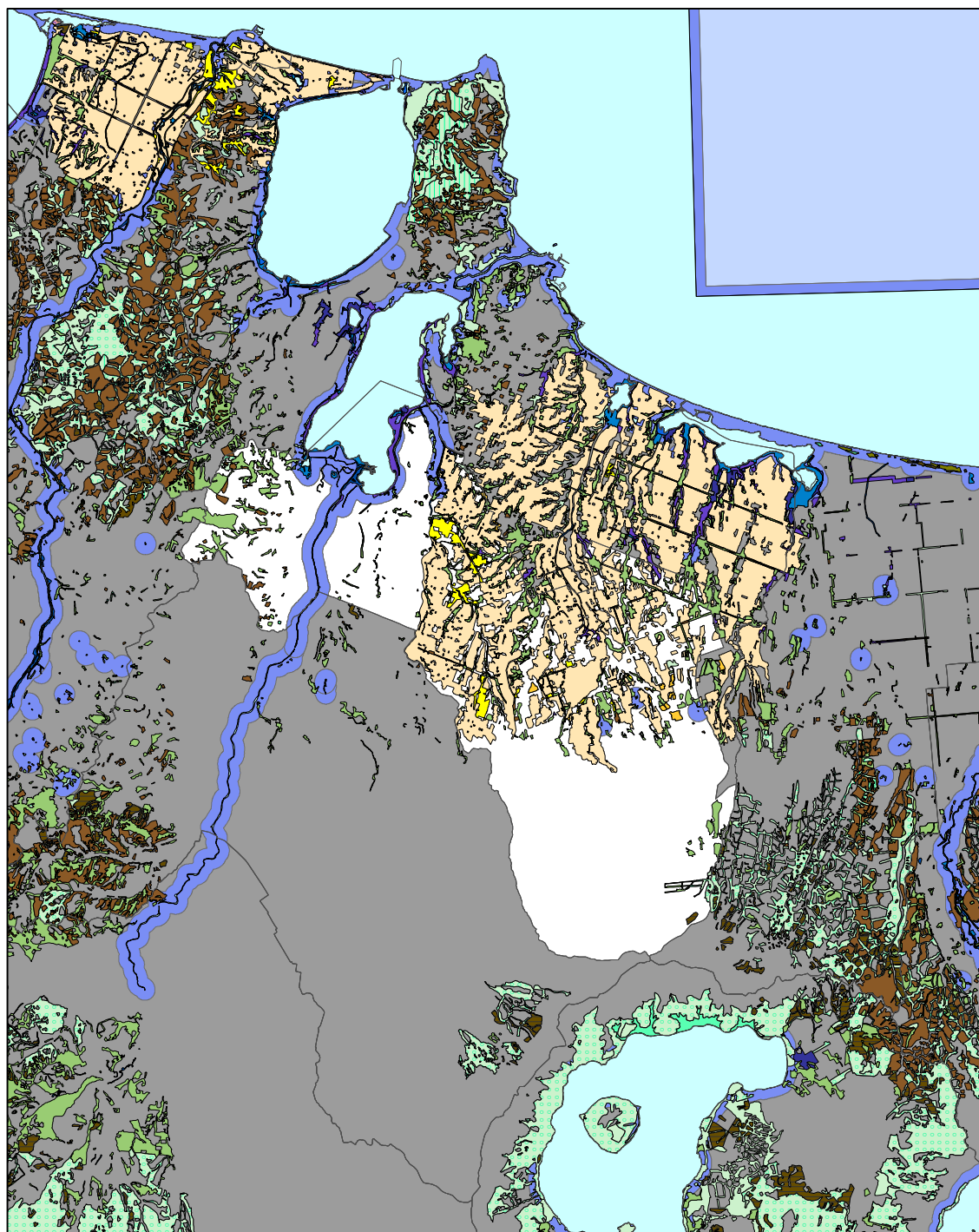
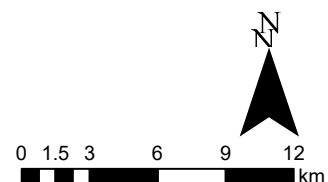


図 5-105 鳥類分布ポテンシャルエリア



凡例

次ページ



出典：環境省「生物多様性情報システム自然環境保全基礎調査 植生調査 第6回（1999～2012）、第7回（2013～）
1/25,000 植生図（2025年閲覧）」を基に作成

図 5-106 鳥類分布ポテンシャルエリア（植生図）

凡例

	ササ群落 (I I)		ヨシクラス
	トドマツーミズナラ群落		ヨシ群落 (代償植生)
	エゾイタヤーミズナラ群落		塩沼地植生
	エゾマツートドマツ群集		エゾマツ植林
	ダケカンバーエゾマツ群落		トドマツ植林
	ダケカンバ群落 (I I I)		アカエゾマツ植林
	トドマツ群落 (誘導林)		その他植林 (常緑針葉樹)
	シラカンバーミズナラ群落		その他植林 (落葉広葉樹)
	ハンノキーヤチダモ群集		ゴルフ場・芝地
	ハンノキ群落 (I V)		牧草地
	ヤナギ高木群落 (I V)		畑雑草群落
	ヤナギ低木群落 (I V)		開放水域
	ササーシラカンバ群落		開放水域から500m圏内
	シラカンバーミズナラ群落		
	ササ群落 (V)		
	オオヨモギ群落		
	ハマニンニクーコウボウムギ群集		
	ヒルムシロクラス		

出典：環境省「生物多様性情報システム自然環境保全基礎調査 植生調査 第6回（1999～2012）、第7回（2013～）
1/25,000 植生図（2025年閲覧）」を基に作成

図 5-107 鳥類分布ポテンシャルエリア（植生図）凡例

(2) まとめ

本章で調査した動植物の情報に関して、表 5-64 の方針でゾーニングに反映することとした。また、表中で◎とした各調査項目の分布を図 5-108～図 5-115 に示す。これらは「動植物の分布レイヤー」としてゾーニングに反映することとする。

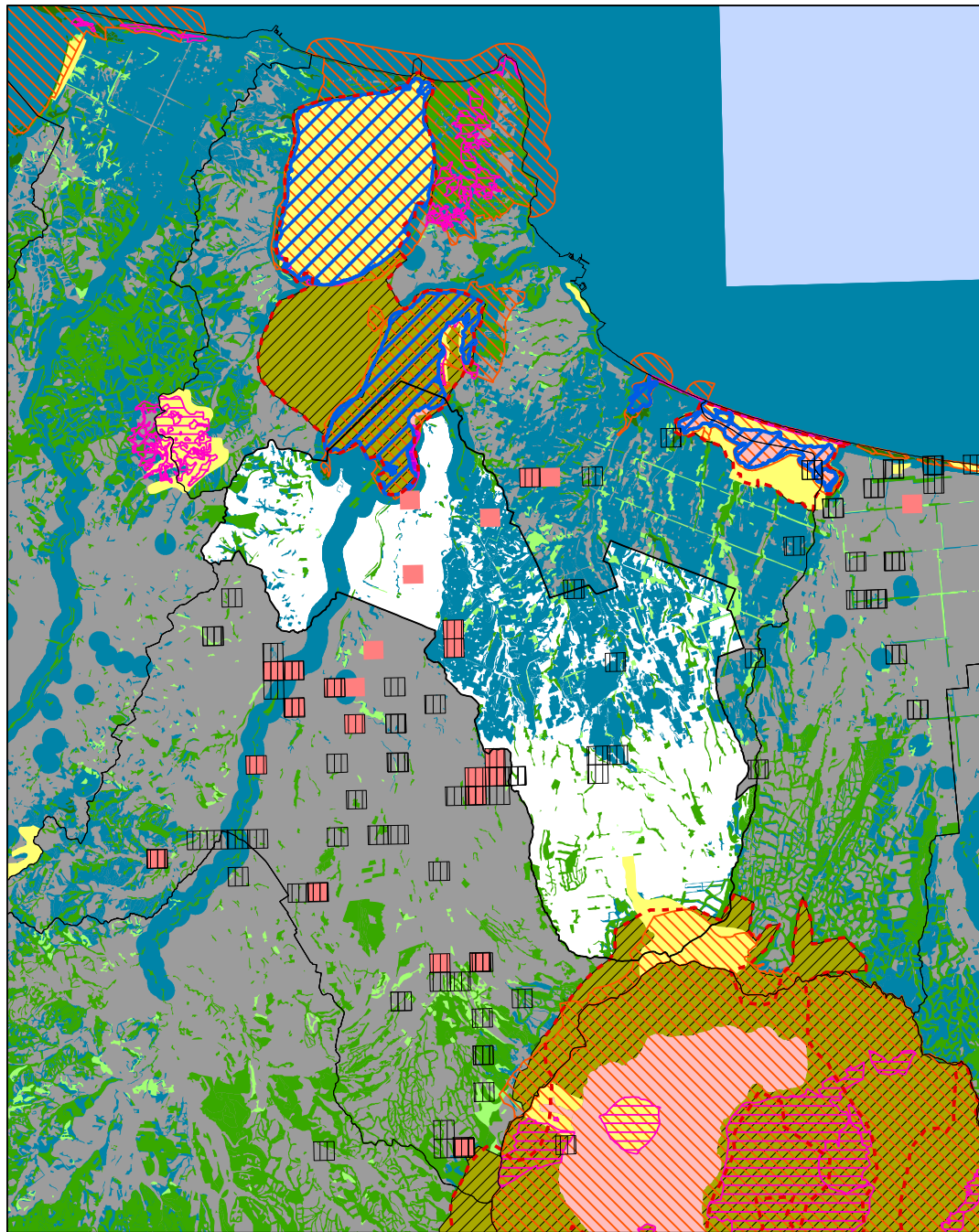
表 5-64 動植物調査結果のゾーニングへの反映方針

調査項目	データ形式	反映方針	
・動物の注目すべき生息地 ・植物の重要な群落 ・自然関係法令	ポリゴン	◎	太陽光発電、風力発電の導入による影響が特に大きいと考えられるため、「動植物の分布状況」に関するレイヤーとしてゾーニングに反映する。
・コウモリ類	ポリゴン (1kmメッシュ)	◎	太陽光発電、風力発電の導入による影響が特に大きいと考えられるため、「動植物の分布状況」に関するレイヤーとしてゾーニングに反映する。
・鳥類分布 ポテンシャルエリア	ポリゴン	◎	太陽光発電、風力発電の導入による影響が特に大きいと考えられるため、「動植物の分布状況」に関するレイヤーとしてゾーニングに反映する。
・鳥類(ガンカモ類の調査地点、渡りルート)	ライン・ポイント	○	太陽光発電、風力発電の導入による影響が特に大きい一方で、ライン・ポイントのため、参考情報としてゾーニングマップに掲載する。
・動物の重要な種 ・植物の重要な種	表 (リスト)	—	分布情報が不明であり、ゾーニングに反映することは難しいため、本章での整理に留め、ゾーニングには反映しない。
・中大型哺乳類 ・巨樹・巨木林	ポリゴン ・ポイント	—	本章での整理に留め、ゾーニングには反映しない。

◎：ゾーニングに反映／○：参考情報として反映／—：ゾーニングに反映しない



図 5-108 動植物の分布レイヤー（まとめ）



凡例

- コウモリ分布 (ハイリスク種)
- コウモリ分布 (ハイリスク種以外の種)
- 生物多様性の観点から重要度の高い湿地(重要湿地)
- IBA
- KBA
- 特定植物群落
- 植生自然度 8
- 植生自然度 9
- 植生自然度 10

- 国の天然記念物
- 国立公園、国定公園
- 鳥獣保護区
- 特別保護区
- 鳥類分布
ポテンシャルエリア

0 1.5 3 6 9 12 km



図 5-109 動植物の分布レイヤー (個別情報まとめ)

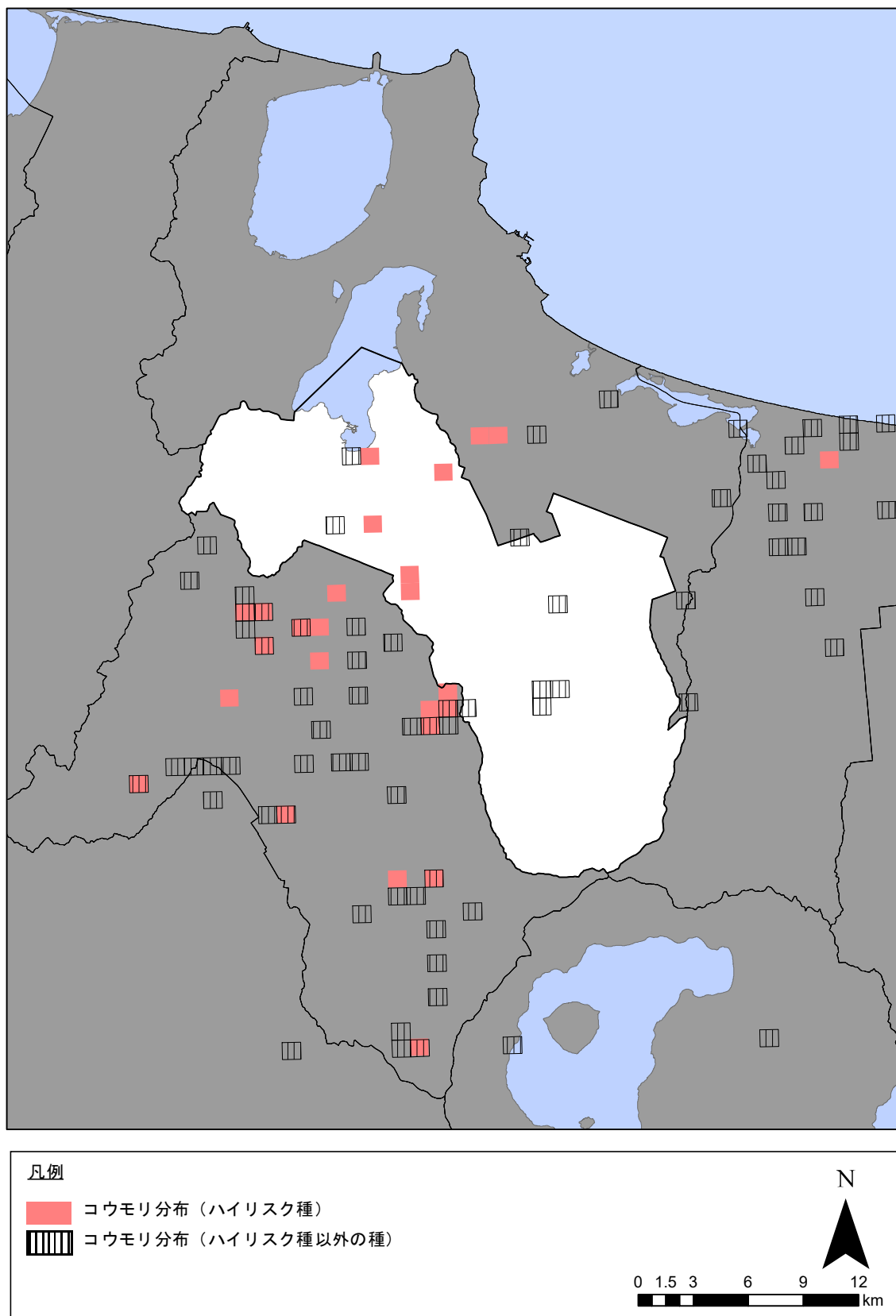


図 5-110 動植物の分布レイヤー（コウモリ分布）

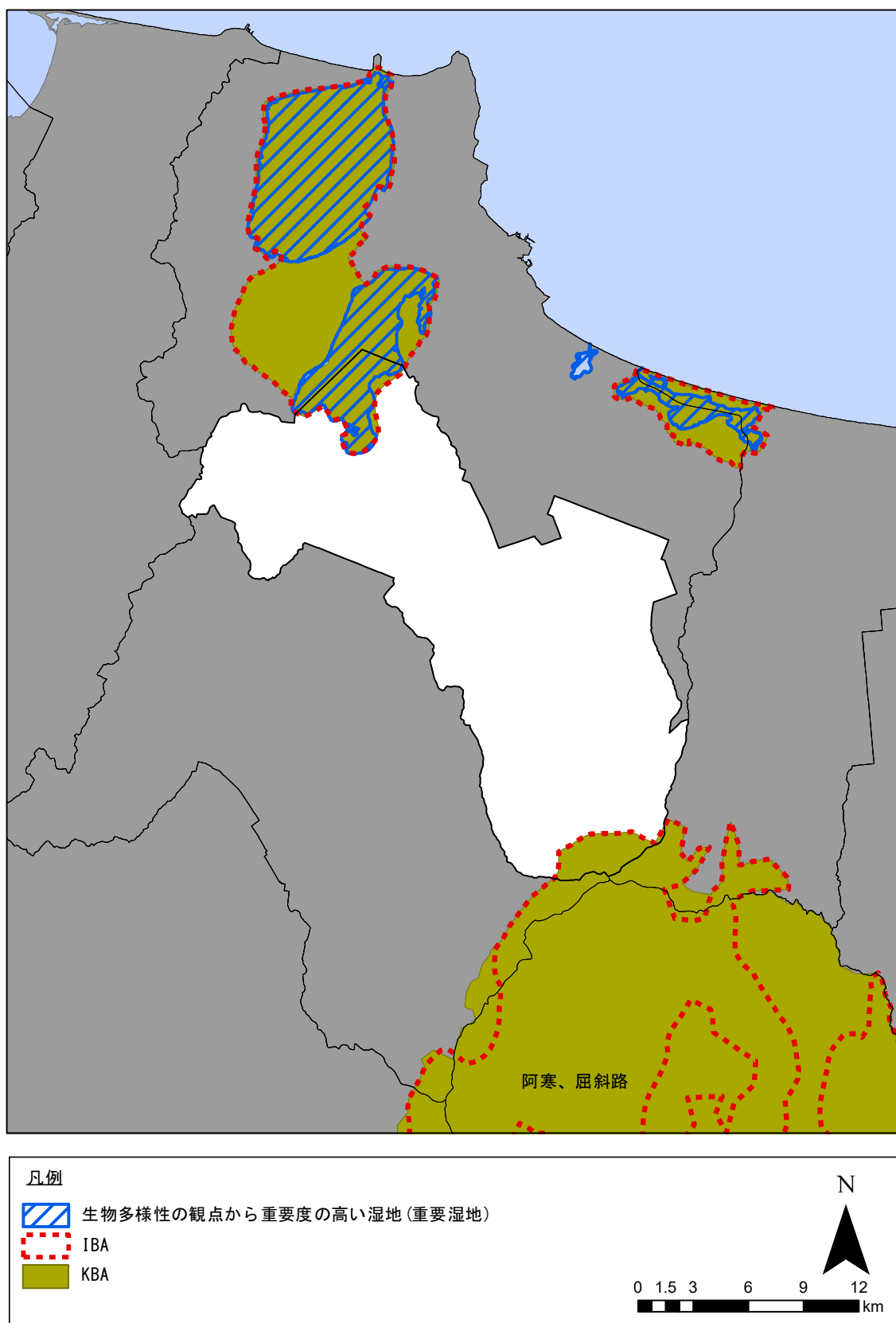
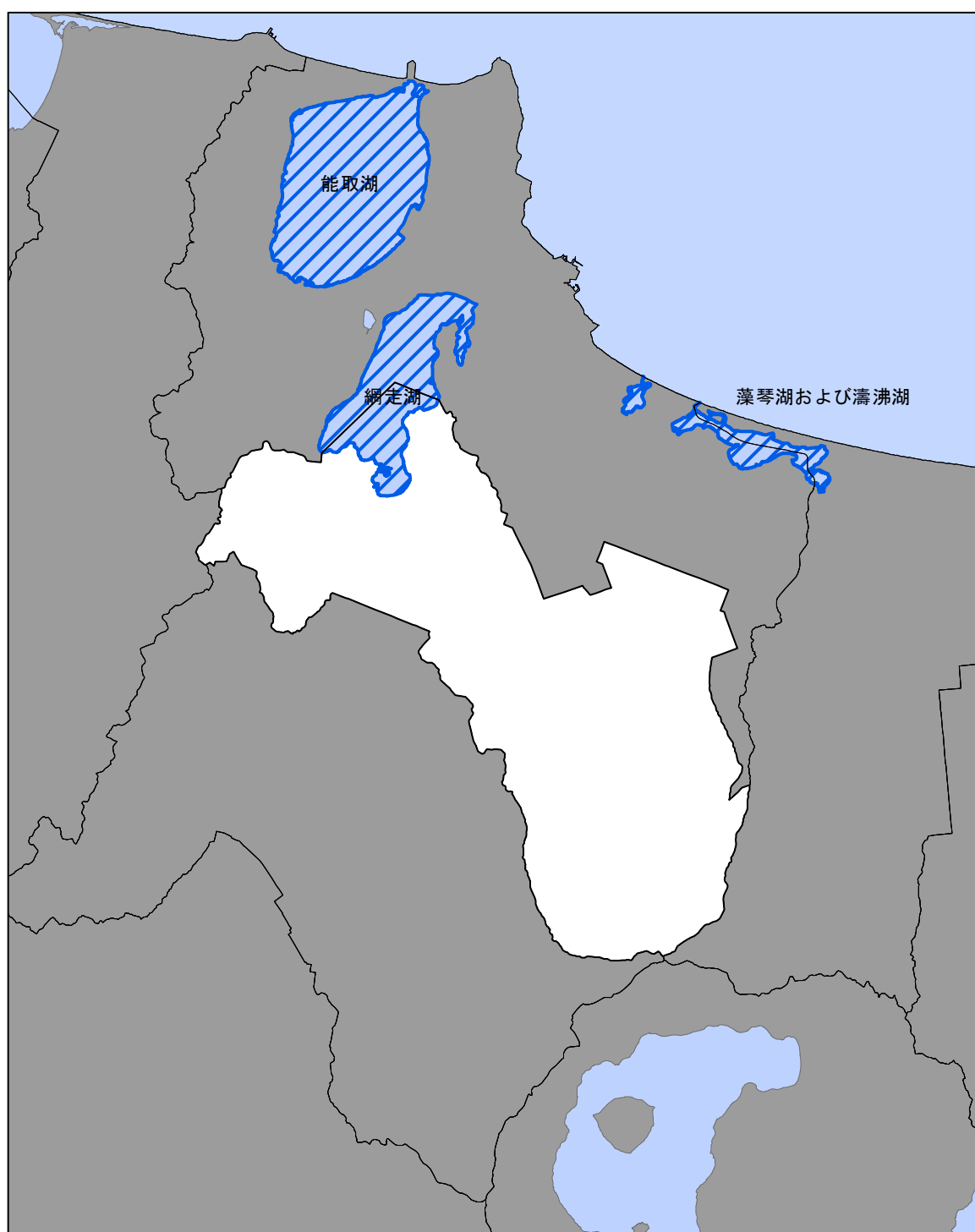


図 5-111 動植物の分布レイヤー（重要湿地・IBA・KBA）



凡例

 生物多様性の観点から重要度の高い湿地（重要湿地）

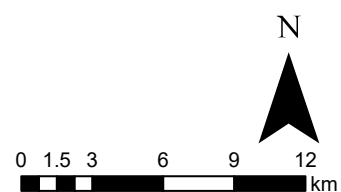


図 5-112 動植物の分布レイヤー（重要湿地）

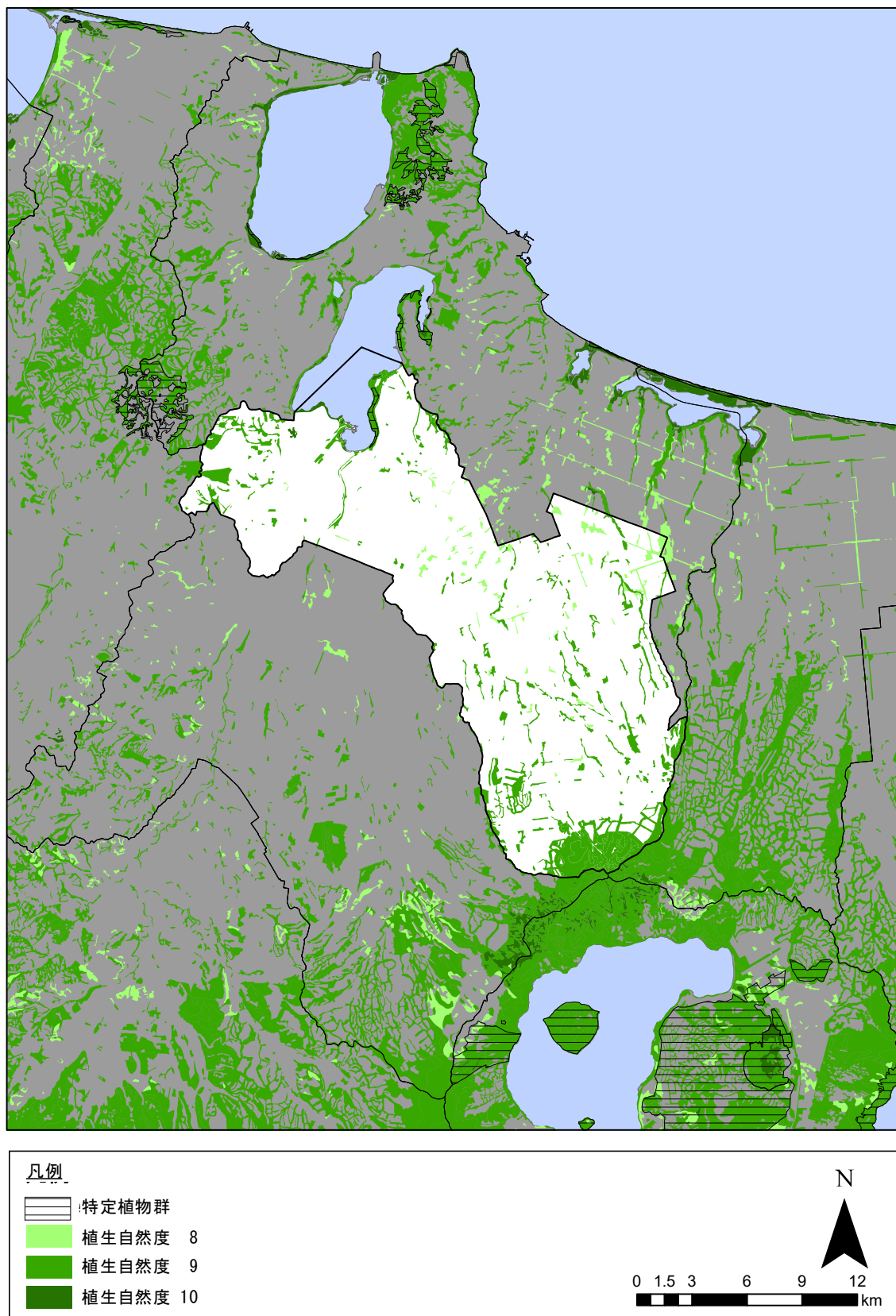


図 5-113 動植物の分布レイヤー（特定植物群・植生自然度8～10）

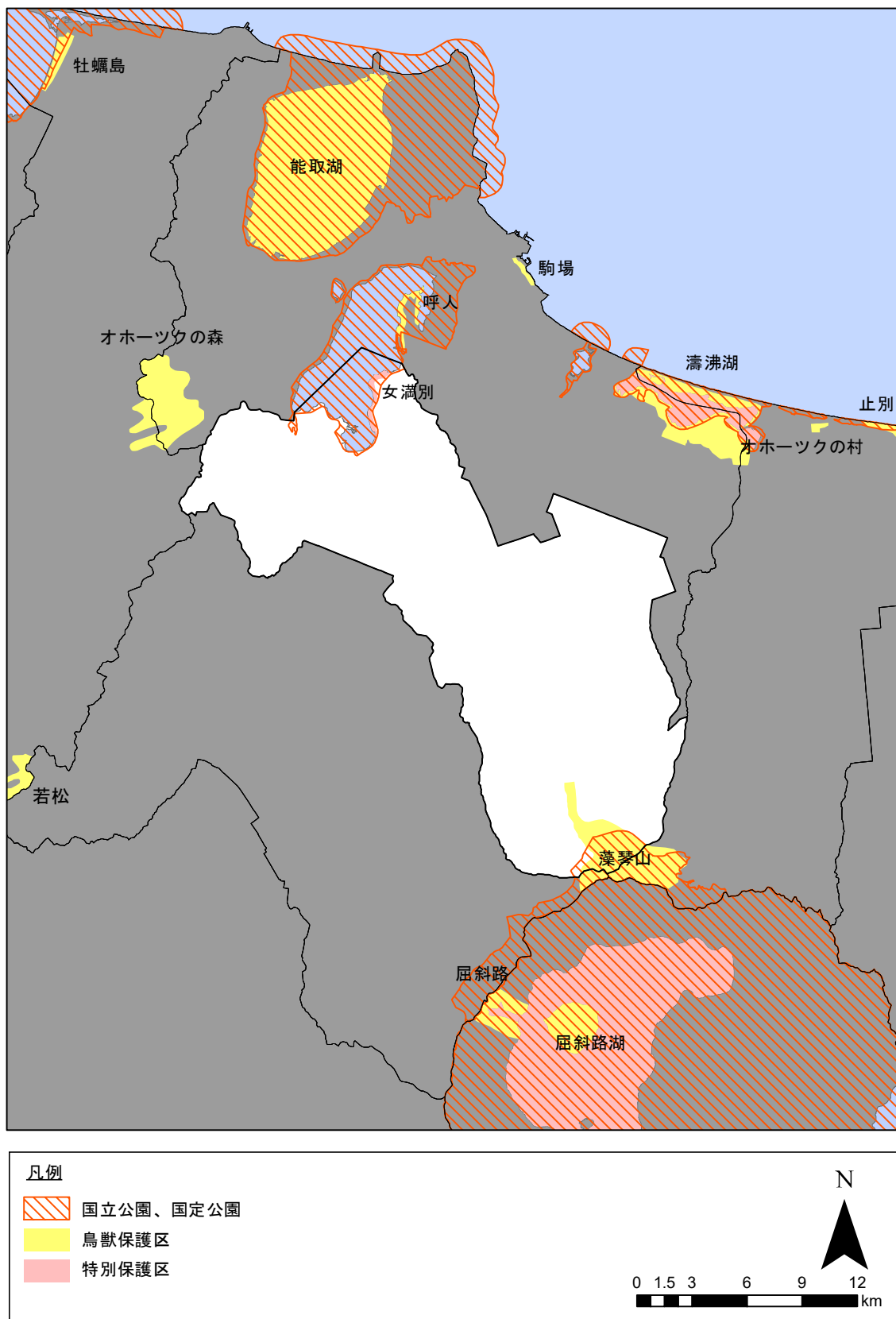


図 5-114 動植物の分布レイヤー（国立・国定公園・鳥獣保護区・特別保護区）

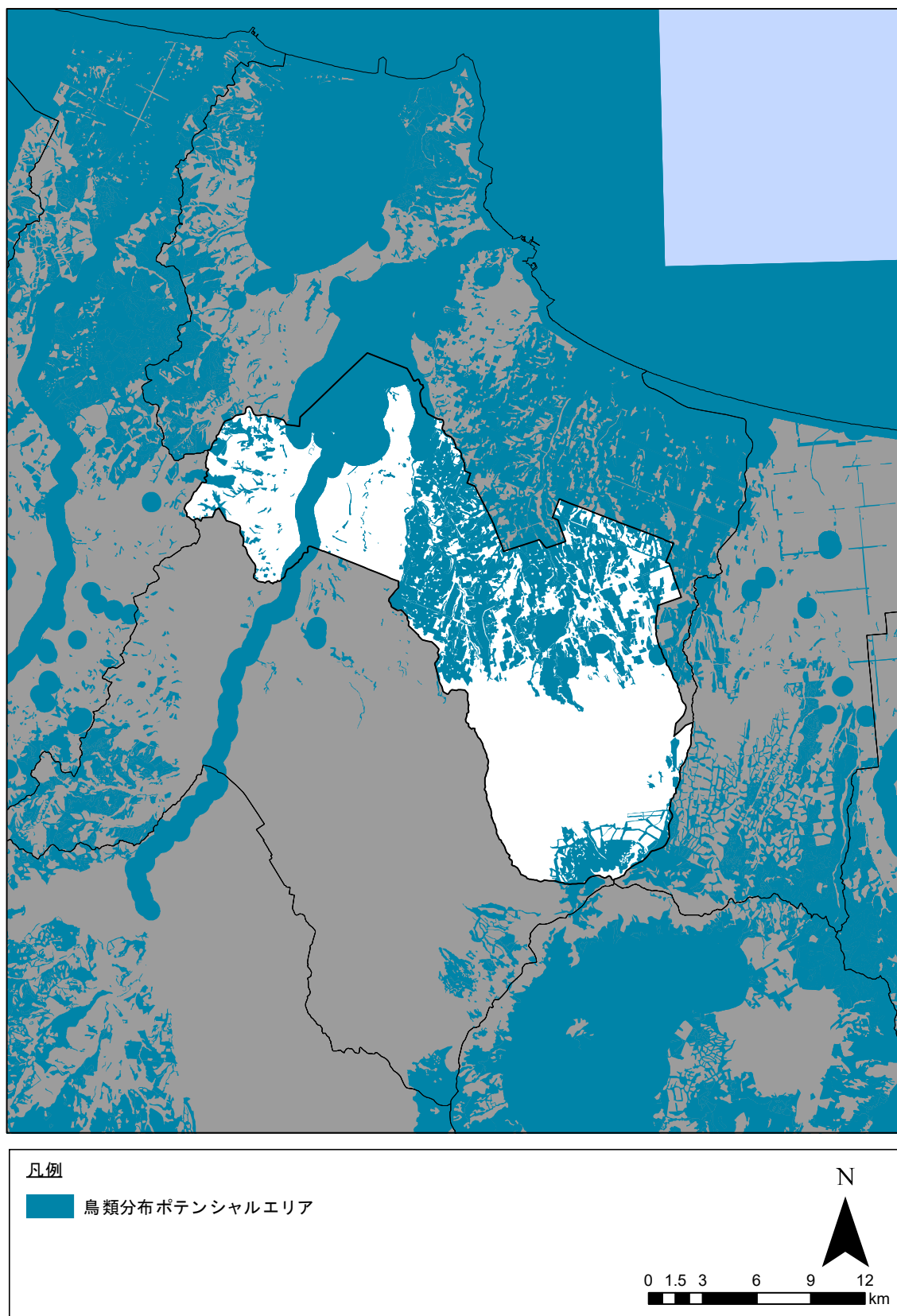


図 5-115 動植物の分布レイヤー（鳥類分布ポテンシャルエリア）